

一般社団法人押井宮農組合（愛知県豊田市）

農の営みを将来に！地域まるっと「地域支援型農業」で繋ぐ未来

▶ 背景

豊田市北部に位置する押井町は、標高約300～500m、森林と谷間のわずかな農地の山村集落で、農地の管理や集落機能の維持のため中山間地域等直接支払制度に取り組んできたが、高齢化等により農地管理が一層困難となり、平成23年「押井宮農組合」を設立。農業機械・施設の導入等により農地を荒廃から守ってきた。営農組合設立後も人口減少・高齢化が深刻化するなか、集落全住民で話し合い、農地と集落を守るため「地域まるっと中間管理方式」を導入、平成31年に非営利型の「一般社団法人押井宮農組合」へ移行し、集落を消滅の危機から救う「自給家族」の取組を開始した。



▶ 取組概要

農地中間管理機構を活用した「地域まるっと中間管理方式」を導入し、集落内の全水田（7.6ha）を集積し営農組合に利用権設定している。自作を希望する農家とは特定農作業受委託契約を締結し、働けるうちは農業を続け、リタイア後は営農組合が耕作管理することで、将来にわたり耕作放棄されない仕組みとなっている。

「収穫の喜びも不作のリスクも“家族”として共に分かち合う自給仲間になってもらう」という考えに共感した100家族と3～10年の長期栽培契約を結び、集落で生産される特別栽培米ミネアサヒの栽培経費として3万円/俵を前払いしてもらったCSA（地域支援型農業）プロジェクト「自給家族」を展開し農地を保全している。

付加価値をつけ地域のブランド米とするため、ミニライスセンターを新設し、穀物保冷庫をクラウドファンディングにより資金調達し整備している。

「自給家族」には「里帰り」の機会として、収穫祭などのイベントや農繁期の除草作業、集落の環境美化活動などの場を提供し、押井町の一員として地区の行事に参加、交流してもらい、関係人口と共に集落を守っている。

交流拠点の場とするため、維持管理が困難となっていた廃寺（二井寺普賢院）を借り受け、地域住民と関係人口で整備し、講座や体験会などを開催している。

▶ 今後の展開

「自給家族」の取組は、同市内の他集落にも波及。また、押井宮農組合が中核となり、押井集落を含む9集落からなる自治区で取り組む農村RMO（農村型地域運営組織）プロジェクトのひとつとして拡大展開している。

▶ 写真で見る団体の取組み



押井宮農組合の中心メンバー



押井町の水田景観



「自給家族」の収穫イベント



新たに整備したミニライスセンター



特別栽培米ミネアサヒ



クラウドファンディングにより整備した穀物保冷庫（みんなの蔵）

梅原地域ふる里活性化協議会（岐阜県山県市）

自然豊かな環境を後世に

▶ 背景

山県市の南部に位置する梅原地区は、自然豊かな閑静な田園風景を残しながらも、隣接する岐阜市等への人口流出や少子高齢化により遊休農地が増加し、地域の財産である農村風景・自然環境が消失していく不安が住民に生まれていた。このため、この梅原に愛情を持ち自然豊かな環境を末永く後世へ伝えていきたいという願いを実現することを目的に、平成19年に「梅原地域ふるさと活性化協議会」を設立した。



▶ 取組概要

協議会は、農家、非農家に関わらず、自治会、水利組合、ホタルを守る会、農協女性部、子ども会育成会など地区にある全ての団体（21団体）が参加し、市や小学校と連携しながら、農用地・水路・農道等の維持保全活動のほか、生活環境の保全、生態系の保全、食農教育の推進など地域ぐるみの活動を実践している。

自治会が中心となり、ゴミの不法投棄防止のための巡回・点検活動を行うほか、子ども会育成会と共同で実施する「クリーン作戦」では、親子と一緒に通学路、農道等のゴミ拾いを行い、子供たちが農村環境のすばらしさを体験できる環境教育の場となっている。

高田ホタルを守る会がホタルの生息地を保全整備し、子ども会育成会と連携してホタル勉強会、鑑賞会を行うことにより環境保全の理解につながっている。

農協女性部が梅原小学校と連携し、「サツマイモ」「大豆」「もち米」栽培や豆腐や味噌の農作物加工、餅つき等の食農教育活動を実施。子供たちが農業と食生活の関わりを学ぶことで農業への関心を高めることにもつながっている。

▶ 今後の展開

今後は取組を継続しながら、梅原にゆかりのある他地域や地元出身者との交流等、さらに活動の幅を広げ、「住民がこの梅原地区に愛情を持ち、自然豊かな環境を末永く後世に伝えていきたい」という願いの実現と発展を目指している。

▶ 写真で見る団体の取り組み



クリーン作戦（草刈りと水路の清掃）



法面の草刈り



ホタル勉強会



食農教育（芋ほり、稲刈り）



食農教育（豆腐作り、餅つき）



梅原出身の新規就農者（谷原いちご農園）

農事組合法人キタコマツファーム（三重県四日市市）

北小松の健康・伝統・大地をつなぐ～北小松そだち～



背景

四日市市の南東部にある北小松地区は、小規模農家による水稲作中心の農業がおこなわれてきたが、基盤整備事業を契機として平成11年に「北小松営農組合」を設立。その後、農家の高齢化等により担い手が減少、耕作放棄地の増加が危惧されるなど、将来の地域農業への不安の声が広がったことから、話し合いにより「地域が一体となって農地を守っていく体制」として、平成18年に「農事組合法人キタコマツファーム」に移行した。

取組概要

キタコマツファームは、地域農業の中心経営体として大区画ほ場を含む約21haの水田で、水稲＋小麦＋大豆の輪作体系を確立しており、エコファーマーの認定取得、ドローンによる病害虫防除、サトイモのたん水栽培の実証試験など、新たな技術や品目の導入にも積極的に取り組んでいる。

また、味噌作りに取り組んでいる女性グループと連携し平成23年に製造部を設立、6次産業化の取組みを開始した。古民家を改修した施設で、法人生産の米と大豆を原料にした味噌作り、地元産のなすと米麴から、なすの麴煮（惣菜）を開発・製造し、ともにJA直売所等で販売し地元の味として好評を得ている。

さらに、緑ゆたかな北小松をまもる会の一員として、自治会、農家組合、長寿会、レディースクラブ等と交流し、地域の美化活動や三世代交流水田、親子芋ほり体験、ゲンジボタル観察会などにも取り組み、農業のみならず地域全体の振興にも大きな役割を果たしている。

三世代交流水田では、児童が長寿会の指導により米づくりを行っており、苗の手植え、鎌を使った稲刈り、足踏み脱穀機による脱穀などの旧来の農法も体験することで、農業や環境保全の大切さを学び文化を伝承している。

今後の展開

高齢化が進み若手後継者の育成が必要であり、2～3年後を目途に複数の若手を後継者として育成する。また、農業所得の向上のため、栽培技術の改善による品質や収量の向上や、新技術・新品目の導入に積極的に取り組む。これらにより、地域の農業、住民が生き生きと暮らせる地域づくりを持続的に進める。

写真で見る団体の取り組み



地域農業の担い手として活動



三世代交流水田での稲刈り



親子芋ほり体験



北小松長寿会の指導による餅つき



女性グループによる味噌作り



女性グループが開発した味噌、なす麴煮